3 月 19 日の説教要旨　　　　「祈りの場からこの世へと」　　　　山本一牧師

ルカによる福音書9章28-36節

●昔から人は悠然とたたずむ山に特別な思いを抱いてきました。聖書の世界においても「山」は特別な「逃れの場所」や「神さまとの出会いの場」として出てきます。
イエス様はしばしば一人で山に登っておられたようですが、今日の箇所では「ペトロ、ヨハネ、そしてヤコブを連れて」とあります。これは、3人の弟子にイエス様の山登りの秘密が明かされた出来事だと受け止められます。山の上で彼らが見たのはイエス様の姿が神々しく光輝き、モーセとエリヤと語り合っている光景でした。モーセとエリヤは旧約聖書を代表する人物です。モーセはシナイ山で神と出会い十戒を与えられ、エリアもホレブの山で神の言葉と出会っています。二人とも山で特別な神さまからの励ましを受けた人物なのです。つまり、イエス様はこの世の悲惨な現実や人の無理解に直面する日々の中で山を祈りの場とし、そこで旧約の信仰者たちの生き様と神の臨在に思いを馳せて、励ましと使命を受けつつ歩んでおられたことを今日の話は物語っているのです。
●今日の箇所にはペトロが、この光景を見て感極まり、山の上に仮小屋を建てて留まるよう勧めた、という話が記されています。しかし結局その提案は無視され、イエス様は山から下りて、全ての人の救いのために十字架への道を歩んで行かれるのです。この事は、私たちもまた「山から降りて」つまりこの世の現実としっかりと向き合って生きるよう勧めているのです。
●私はアメリカで一冊の聖書を譲り受けました。それは 1911 年大逆事件で国家によって処刑された菅野須賀子さんの弟さんの聖書でした。その書き込みを見ると彼は 20 世紀の初め、日本人に対する厳しい差別と迫害があるアメリカで、アラムロック山でこの聖書を読み、祈っていたことがわかるのです。
この受難節、主の受難のみならず、先達が苦難の多い日々の生活の中で「祈り」という山に登り、主が共におられる事に希望を置いてこの世へ立ち向かっていったことを思い起こしましょう。
●これから先、世も教会も人も変わっていくでしょう。けれども故郷の山が悠然と変わらずそこにあるように、伊丹教会が祈りの場としてこの地に立ち続けられるように、そしてイエス様はいつの時代でも困難と向き合う私たちと共にいてくださることを覚え、この世で希望を持って生きることがでますよう祈っていきたい。